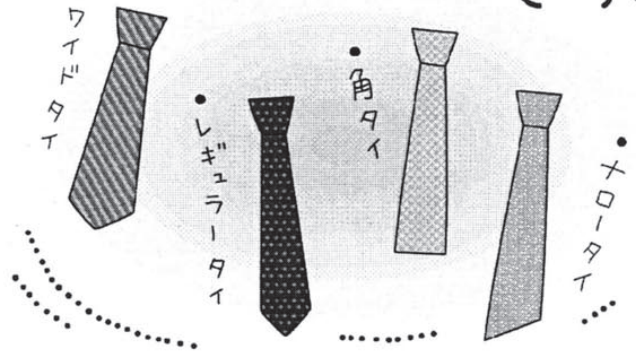


奥様のかゆ〜いところに手が届く まごの手新聞「無料」

10月1日は

ネクタイの日

です。



「ネクタイの日」

明治15年(1882年)のこの日、帽子店を経営していた小山梅吉が、日本で初めてネクタイを作ったと言われています。当時、すでに日本でも販売されていた輸入品のネクタイをほめて、研究したそうです。ネクタイに使われる生地はだいたいの場合シルクですが、始めは西陣織の女性用帯を使って作りました。

まごの手歳時記

このころ、夏はクールビズのためにネクタイを締める人が減りつつあるようですが、やはり胸元が寂しい気もします。涼しくなるこいよいよおしゃべりな男性の本領発揮の季節ですね。

趣味を始めよう!

日本にはキルト愛好家が多く、各地で教室も盛んです。一言でキルトと言っても、様々な種類がありますね。小さな布切れを接(は)いで一枚の布に仕立てる「アメリカンキルト」は、物資を大切にしなければならなかった開拓時代に編み出されたものです。

19世紀に、キリスト教を広めようとアメリカの宣教師たちがハワイに渡りましたが、その妻たちがハワイの王族の奥方にキルトの手ほどきをしたのが「ハワイアンキルト」の始まりだそうです。当初はアメリカンキルトと同じように、はぎれをつなぎ合わせて作りまし

南国の自然を縫い込む「ハワイアンキルト」

が、やがて植物などを左右対称のモチーフにしたアップリケをあしらう、独特のデザインに発展しました。我が家の庭に咲く花をモチーフにするなど、自由にデザインしていいのがうれしいところ。しかし人や四足の動物をモチーフにするのはタブーです。なぜならキルトにはマナ(精霊)が宿り、モチーフが抜け出してくるからだとされています。

ハワイの風土と独特の文化に育まれたハワイアンキルトを、習ってみませんか?



がんばれ! 子育てファイル

第二反抗期の子どもとの接し方

小学校高学年になると、そろそろ第二反抗期が始まります。それまで、親の言う事を素直に聞いていた子が急に「口ごたえて」、逆に親の言動の矛盾を批判したりするようになります。



親はわが子の変わりようにたじろいでしまうことも少なくありません。しかし、子供が自立するために大切な時期といえます。親にとっても「いつか来た道」。わが子がちゃんと成長している証拠だと思つて、余裕を持って受け止めた方がいいです。

この時期の子供は、反抗しながら、反面、自分のことを分かって欲しいと思つていて、大人が自分を受け入れてくれることで安心します。そこで、この時期ならではのコミュニケーションのコツをご紹介します。

ひとつは「おはよう」「おかえり」など基本的なあいさつ。子どもから返事がなくても親は必ず声をかけます。また、子どもが機嫌のいい時には話しかけて、何気ない雑談をします。決してお説教ではないので「注意」を。共通の趣味がああ、時々、一緒に活動



しようとして子どもを誘ってみましょう。いすれにしても、子どもが乗ってこなければ次の機会に回します。大切なのは「親が働きかける」ということです。

しかし、腫れものに触るような態度は良くありません。時には、子どもの言い分を尊重しつつ、自分自身や人生を大切にしようという伝えることが必要です。親の真剣な態度は、子どもに「一人前」としての自覚を促すことにもつながるからです。

あなたらしく生きる100通りの方法

「私らしさ」「私のできること」には
案外、思い込みがあるものです
時には誰かに
「私はどんな事に向いてる?」
と聞いてみると
今まで知らなかった自分に
気づくかもしれません

